論 文 の 内 容 の 要 旨

農業・資源経済学 専攻

平成７年度博士課程　　進学

氏名
大塚達也

指導教官名
八木宏典

論文題目　養豚企業における経営管理と環境適応

本論文は、養豚企業の事例調査を基に、経営体の経営行動を分析した研究である。特に、経営体が環境適応していく上で蓄積した知識資産に注目し、それが経営成長に果たした役割を捉え、経営者が経営を管理して上でどのような領域の知識資産を基軸にしたのかという事について詳しく分析した。また事例経営体が現在抱える問題点を分析し、経営体が環境適応していく上で阻害要因となっている知識資産の欠如を明らかにし、それと前述の経営成長の基軸となっている知識資産の役割との関係について分析した。その結果、経営体の環境適応の失敗は、経営管理階層上層にある知識資産の欠如と、それを基にした経営管理階層のコーディネーションの限界によって起こる事が示唆された。また事例企業の経営管理は、経営者が、管理階層上層の知識資産を押さえる事によって、経営全体をコントロールしているため、コーポレート・ガバナンスを維持する働きをしている事が示唆された。この二つの示唆により、経営体の環境適応の失敗は、経営者が保持する管理階層上層の知識資産により経営管理が規定され、それによって経営者を中心とするコーポレート・ガバナンスが保たれている経営体に、処理能力を超える問題が発生した時に生じるという示唆が導出された。このような論文の成果は、これまで環境適応の結果としての経営体を分析する研究が多く、適応が成功した面に偏って分析が行われていた現状に対し、環境適応のプロセスそのものを研究対象にする事によって、経営体の持つ処理能力の限界を明らかにし、そういった処理能力は、これまで経営体を取り囲んでいた環境と、経営者の持つ知識

資産の特性によって決まるというロジックを呈示した事である。このような研究は、養豚企業だけに留まらず、広く農業の企業的経営に適用できる可能性があり、これまでの農業経営学の研究成果からもその事が支持されると思われるが、今回の研究は、インテグレーションといった経営体の他律的要素が無い事と、創業者が依然として経営者を務めているという条件の規定を受けており、このようなポイントが研究の限界となると思われる。従って今後はこうした条件を取り払った時に、経営体はどのような経営行動を取るのかという事が課題になると思われる。

また、各章の内容は以下の様になっている。

第1章　イントロダクション

第 1 章では、経営行動の分析に関わる農業経営学の既存研究をサーベイし、課題の設定を行った。その結果、本論文は経営史学的視点を取り入れ、時系列で経営体の行動を観察する研究である事、経営成長を観察し、そこに見られる成長の推進力となった知識資産を捉える事、農業経営学の既存の環境適応研究の成果を踏まえ、それらと連続性のある環境適応プロセスに関する分析を行う事、既存の畜産業界における経営経済的経営行動研究の成果を踏まえ、それらの対極にある個別経営の視点で養豚業界を捉える研究を行う事を述べた。

第2章　知識資産と経営行動

第 2 章では、事例の事業展開史を分析し、経営体が成長する上での中核となった知識資産と、それ以外の知識資産とに峻別した。そしてこれらの知識資産の役割分担が、経営体の経営行動を通じて不変である事と、中核的な知識資産に新たな領域を付け加えようとすると、様々な障害が起きてそれを阻害する力が働く事を見た。

第3章　経営管理とコーポレート・ガバナンス

第 3 章では、事例企業の経営管理における重点領域を明らかにし、その領域において経営者の持つ知識資産が中心的な役割を果たしている事を見た。また、経営管理には上層の全般管理と下層の部門管理という、管理の階層性がある事を明らかにし、各事例がそれらの階層のどこに重点領域を持つのかという事を分析した。そして、最終的に、管理階層の上層の知識資産を保持し、経営全体の経営管理をコーディネーションしている経営者が、経営体をコントロールしているというコーポレート・ガバナンスが成立している事を明かにした。

第4章　経営体の環境適応と経営管理

第 4 章では、始めに事例企業が現在抱える問題点について分析した。特に、経営体の存続に関わるような致命的なトラブルに注目し、経営体の環境適応の失敗がどのような部分で起こっているのかを見た。そしてなぜ経営体がそのような状況に至ったのかを、過去の経営行動から探り、必要な知識資産が欠如している事と、それがこれまで蓄積されなかっ理由を明かにした。最後に、第 3 章の結果を踏まえ、必要な知識資産の追加を拒む経営管理の特性に注目し、環境適応の失敗は、経営管理上層の経営者によって保持される知識資

産の領域の欠如と、経営管理の各階層をコーディネートして対応できる限界とによって決まってくるという示唆を得た。

第5章　終章

第 5 章では、論文全体の要約と結論、論文の分析結果から得られる示唆、今後の課題等を整理した。